

宇都宮 FS 邸 4G-house



4世代が共に暮らす家

小学生の子と両親、その祖父母、曾祖母の4世代が一つ屋根の下で暮らす家。曾祖母がこの地に家を建ててから2代に渡り住み続けた家を解体し、その土地に新たに6人が共に住もう。

建築概要	
所在地	宇都宮市峰
用途	専用住宅
規模・構造	木造2階建
建築面積	142.18㎡
延床面積	206.33㎡
建築主	藤田・下川
設計者	下川彰建築設計事務所
施工者	株式会社イケダ工務店



多層の路地のような通り道



中庭を介してお互いの様子を感じる



通り庭から光と風をリビングに導く



リビングの気配を感じるプライベートな個室



家族をつなぐコミュニケーションの場は光と風を取り込む環境装置

記憶の継承

この土地で2代に渡る暮らしを支えてきた家を解体し、新たな住まいを再構築して建替える計画である。長年の暮らしを再構築することは、そこに住む人たちの記憶も含めた生き方に深く関わることであり、大きな責任を伴うことを強く意識させられる。そこでこの計画を始めるに当たって、土地の記憶を継承することを大切にしたいと考えた。この土地に建っては壊され、脈々と続いていく家々の歴史の一部として、土地に住み続けている人々の記憶—風景や風、光、音、匂い、気配、そして土地が纏う雰囲気—を継承することをコンセプトとした。

これまでの暮らし方を新しい家に落とし込みつつ、より快適で心地よい暮らしをいかに構築するか。曾祖母の居間・寝室の位置、腰掛けた椅子から見える景色と光の注ぎ方、祖父母が食事をしながら見る風景、周辺からの距離感と音の感じ方、近隣との視線の逃し方など、長年の暮らし方を継承しつつ、奥に深い敷地形状における光・風の取り込み方や、開放感とプライバシーの両立などの解決策を模索している。既存の大谷石塀を再利用して庭に敷き並べることも、土地の記憶を思い起こすものの一つとなった。

周辺環境を読む

家の中で快適に暮らすためには、開放感・明るさを求める一方、極めて個人的な空間としてプライバシーと暗さも大切にしたい。敷地はウナギの寝床のような、間口が狭くて奥行きが深い形状であり、南側が隣家から近いことから、道路と隣地からプライバシーを確保しつつ開くかが重要なテーマとなった。

正面となる南西面は全面道路からの音や視線を遮る為に、開口の無い壁を立ち上げているが、高さを道路に対して低くすることで圧迫感を抑えた。その壁を割って開いたような通り庭と中庭は、南北と東西の風の通り道となり、各室に設けた風の出入り口から通り庭を介して、通風による心地よい環境をもたらしている。また、建物の奥へ奥へと光を導く光の通り道としても機能し、南北ふたつの塊をずらして生まれる空間の抜けが、内部空間に心地よい解放性をつくり出している。北西側は西日や周辺の音を遮りつつ、玄関から中庭へ抜ける大きな風穴を開けることで、暮らしの気配が外へにじみ出て、心理的にも近隣に柔らかに開くことを意図している。3つの庭は活動の性質により、周辺環境との関わりを考えて使い分けられる計画とした。

4世代が共に暮らす—住み心地の良い距離感

4世代が一つ屋根の下に集まり、世代、習慣、暮らし方の違う6人が心地よく暮らせる家を目指している。そのため、お互いの距離感を特に慎重に計画する必要があると考えた。建物を南北に貫く通り庭と、その上部に設けた吹抜けは、各個室から少し顔を出すことで、住人同士が視線や会話を交わす交流の場となり、家全体をつなぐ多層の路地のような空間とした。また、各自が持つ個人スペースは、通り庭から奥まらながら心理的距離を反映して配置することで、他者の目を気にすることなく個人的な時間を過ごすことが出来る。プライベートな場所、コミュニケーションの場所、中間的な場所など、様々な居場所を選択できることにより「住み心地」の良さを追求した。

家の中央にある2層吹き抜け中庭は、各世代の居間が面して開いており、心地良い距離をとりながら気配をいつも感じられる空間とした。一方の壁を少し角度を振ることで広がりを持たせると共に、視線を感じすぎないようにも配慮している。中庭は、奥の居場所に光と風を届ける重要な環境装置であり、内部空間に開放性をもたらし、家族をつなぐ柔らかなコミュニケーション装置となっている。

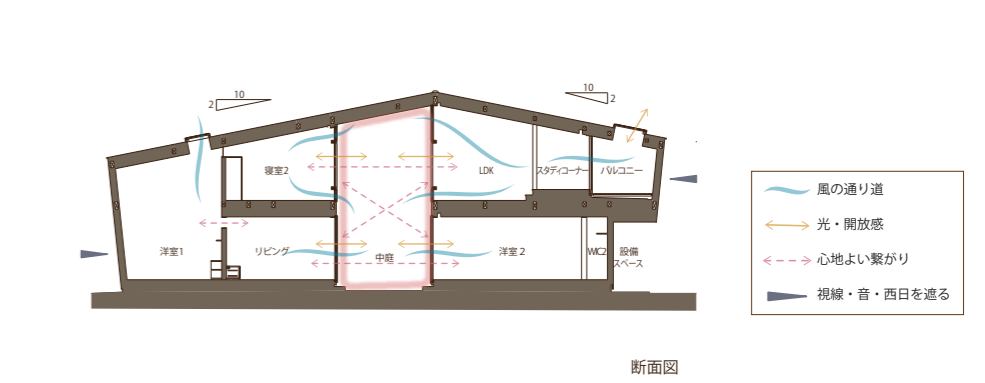
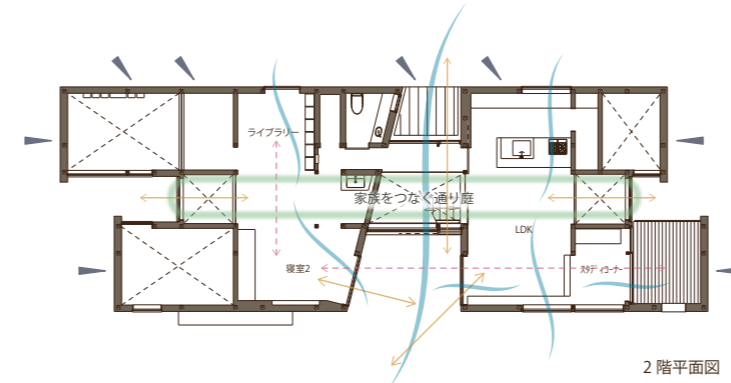
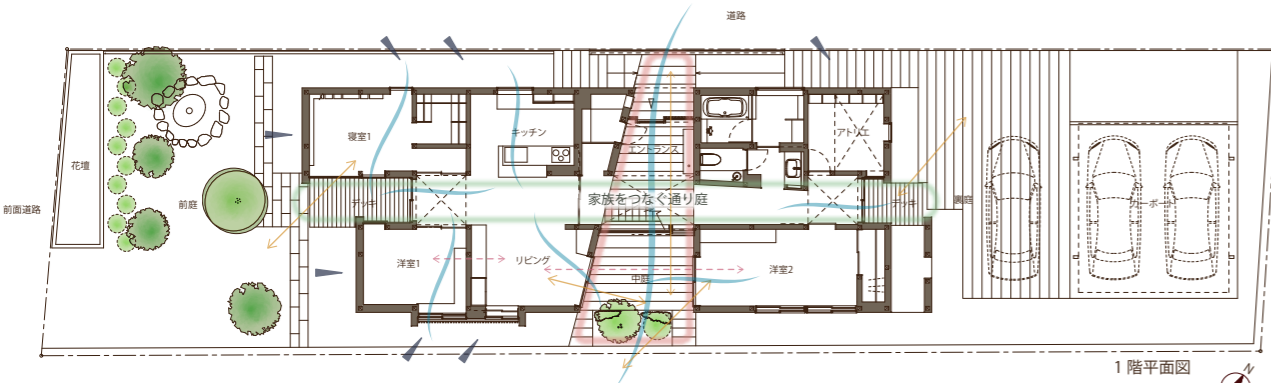
4世代が共に暮らす—居心地の良い空間づくり 木・石・漆喰・緑

それぞれのプライベートな居場所での「居心地」の良さも追求している。それぞれの居場所での時間を快適に豊かに暮らせるよう、落ち着きと温かみのあるしつらえと、お互いの距離感を大切に、快適な環境づくりを目指した。

1階のリビング・ダイニングスペースは天井を低く抑えて落ち着ける場所とし、個室やアトリエは吹き抜けのように天井を高くし、高揚感や想像力を掻き立てる空間づくりとしている。個室間もお互いの気配を感じる程度の距離感、とじこまれる空間、オープンにつながる空間など、関係性を空間に反映したしつらえとしている。2階は全ての空間をひと繋がりにして解放感を強調している。

また、夏には体に当たる通風の確保や冷房時の冷気だまりなどを計画し、冬には直射日光を建物深くまで取り込めるよう配慮し、環境的な心地よさも追求した。

内装には、県産木材を効果的に用いることで、木の温かみ感じ、木のおいに癒され、手触り・足触りの良さを感じられる。一部の床に大谷石を用いたり、壁天井に葛生の漆喰を用いるなど、馴染みのある材料を用いて親しみのある空間づくりを心がけた。



中庭の抜けと奥行きを感じるエントランス



重心を下げた落ち着いたリビングと洋室1へのつながり



西日と視線を遮りつつ開放感のある2階LDK



スタディコーナーとバルコニー 落ち着きと開放性を段階的につなぐ

これまでの土地における暮らしの中で培ってきた生活を崩さないことに加え、それぞれの暮らし方や個室のしつらえ・明るさなど、新たに2つの家族が集まって住むにあたり挙げた要望を十分に詰め込んでいただきました。室内は外観から想像できないくらいの開放感があり、住宅地にありながらどの方向を向いても景色が楽しめます。また、ふとした時に窓越しに曾祖母の様子が目に入ったり、子供が反対側から手を振って呼んでいたりと中庭を中心とした生活を楽しんでいます。 建築主：藤田、下川

大雨の地鎮祭からのスタート。工事期間中はコロナ禍と重なり、材料の流通が制限されるという大きな問題を抱えた中、現場・職人・各業者とも懸命に対応してくれました。建主でもある設計者は、問題があれば直ちに現場に駆け付けてくれて、迅速かつ柔軟に対応、時には自ら現場の手伝いをする場面もありました。無事竣工引渡しを迎え、設計者がこの建物に込めた思いを形にすることが、最大の苦勞であり、施工者の誇りだと感じました。 施工者：イケダ工務店